



### 「秘密の場所」

教養部 堀田 敏幸

図書館を思い浮かべるとき、体育館や美術館、劇場といったものとは違う魅力を感じるのなぜだろうか。ここには他の建物にはない、その人だけの秘密のようなものが潜んでいるように思えるのだ。

遠い記憶の方から思い出してみると、小学校の図書室にはハードカバーの子供向きの辞典や物語が棚に多く並んでいたように思う。私は小、中学生の頃は読書好きでなかったのに、本を借り出すことが少なかったが、それでも時に借り出して読むことがあった。本には裏表紙に紙の袋を貼り付けて、そこに読者カードが入れてあった。借り出した者はそれに日付と名前を書くことになっていた。ある時、私は友人の名前をそこに発見して、「あいつもこの本を読んだのか」と思って、本の内容以上に、同じ本を借り出した人物のことが気に掛かった。あの友人がこういう物語を読むのかという、その人物の秘密の内面に触れたような気がしたのだ。本には日常生活とは違う次元がある。それを私は垣間見たのだろう。

高校時代、私は本をよく読むようになっていた。興味のある分野は文学で、詩や小説を好んで読んだ。自分で買った文庫本の他に、図書館の本も時々利用した。ある時、学校へ行くのに遅刻してしまい、教室へ途中から入っていくのも億劫(おっくう)だったので、その時間は図書館へ避難することにした。朝の一時間目で生徒は誰もおらず、係りの人がカウンターの奥に居るだけだった。私は授業中に図書館に来ていることを注意されるのではないかと心配したが、何ともなかった。私は静まりかえった天井の高い大部屋の片隅に、書棚から本を一冊取り出して陣取った。なぜかこの席が私に与えられた秘密の場所であるかのように、私は授業をサボったことも忘れて、自分一人の世界に入り込んでいた。図書館は人が一つの席に座って集中するのなら、そこにはその人一人だけの世界が誕生するのであろう。図書館は公共の場でありながら、人がある一つの場所を占めるやいなや、そこは私的な空間と化す。なぜなら、机に向かって読書に集中し、他事を忘れて思索にふけるとは、己自身と対面していることであり、そこは他の誰も侵害することのできない、その人だけの秘密の場所であるからだ。その人の内面は、本の著者と共にはるか彼方の世界に飛び立ってしまっている。彼の姿は図書館の一隅に置かれた幻影にすぎないであろう。大学の図書館には人の背より高い書棚が置かれていて、読書する人を他人の視線から隠すようにしている。この書棚はいわば森であって、読書する人を秘密の世界に保護しているのだ。

図書館とは公の場所でありながら、まことその人だけの秘密の魅力を作り出している。